

Title	Symposium on historical archaeological and linguistic studies on Southern China, Southeast Asia and the Hong Kong region(華南港澳暨東南亞歴史考古語文研究論文集), Edited by F. S. Drake (General Editor), Hong Kong, 1967.
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.1 (1968. 6) ,p.167- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680600-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

Symposium on Historical Archaeological and Linguistic Studies on Southern China, Southeast Asia and the Hong Kong Region (華南港澳暨東南亞歴史考古語文研究論文集)

Edited by F. S. Drake (General Editor),

Hong Kong, 1967.

一九六一年九月香港大學で行なわれた創立五〇年記念祝典に際し附帯して行われたシンポジウムの一つが最近浩瀚な大冊となつて出版された。先づ第一部は「考古学及び先史時代の移住」を、第二部は「南シナ及び東南アジアの人種群、その言語と移住」を、第三部は「歴史時代における漢人の南漸」を、第四部は「呂度、南東アジアと中国間の海上交通及び東南アジア諸国の発展」第五部は「中国及び遠東研究における香港及びマカオ地域、東南アジア」を取扱つてゐる。掲載されてゐる四十五の小篇を見ると此方面の学者の興味のあつたところの諸問題点が一目瞭然である。簡単にそれを紹介してみよう。

1. ダフ、南シナ、東南アジア、及びポリネシアにおける柄付

部分の分化した各種新石器時代鑿 (Roger Duff, Neolithic Adze with Differentiated Butt, in South China, South-East Asia and Polynesia.) 在跋石斧の研究に熱心なりハーベーンズ博物館のダフ氏が、大陸と海洋方面とのにおける有跋石斧、有肩石斧の相互関係を論じたもの、ベンデシナの有肩石斧は青銅斧の影響を受けて発生したもの、シナの有肩石斧は有跋石斧からの派生と説かれてゐるが、之は実証的な証拠の提供が今少し欲しかつた。

2. ハールベイム、東南亞後期先史時代の二種の土器伝統

(W. G. Solheim II, Two Pottery Traditions of Late Prehistoric Times in South-East Asia.) 出世期にサフ

マハ、カラネイ系統とくらべ、マハイ系統との二つの様式が存在つてゐる所説である。

3. ゲンタム、現越南人におけるハニ族の基層文化の永続性 (Nghiêm Thàm, Persistance Culturelle du Strat Indonesien chez les Vietnamiens actuels.) ズムナム人の基層文化を中心としたベトナム要素が今日も強く持続してゐるところ概説的な意見、も少し複雑な人種要素をズムナム人の源流に鑑別してゐたかった。

4. ジャンセ、東南アジアの発掘によつて生じた複雑な諸問題 (O. Janse, Notes on Some Complex Problems raised by Excavations in South-East Asia.) 例のハニ族ナガ代文化における「ヨーロピック移動」その他西方文化の影響を

論じたもの。

廿、ベルト、香港地域の先史古代遺跡概観 (S. M. Bard,

A Survey of Prehistoric Sites in the Hong Kong Region.) 順指せ大嶼島マヘロクシヤ遺跡の調査指である且

紋土器の軟質粗製のむ硬質精製品ひだ回一匁もア五十
二、時代的先後のなごり心を注意して。 (乙上第1部)

六、ダリリコ・ハニ殿ト、タイ族移住 (Prince Dhaninivat, Thai Migrations) 十三注釋に附 タイ族の南遷をタイ史料に基づけたもの。

七、劉逸夫、苗族研究 (Rucy Yih-fu, A Study of the Miao People.) 十四注釋に付して 手の近主の苗族の解

るべてこ。桑原博士以来の回転の間をだらかに日本的新説と正反対である。

八、トマシクモー、南詔人種類 (Michael Blackmore, The Ethnological Problems connected with Nanchao.) 説
蜜はサムル・ムニヤ族、且蜜はモネー・モネー・モネー。在来の各種学説を要略したものの。

九、スカベリ、崑崙王國に關するタマの「文鑑」 (Kachorn Sukhabani, Two Thai MSS on the K'unlun Kingdom.) サハノ係の如き國家の歴史を記すとあるタマ・鑑文の題名。

十、羅和林、撫民族の星丘歷書ル・リ・枝 (Lo Hsiang-lin, The Calendar of Lucky Days used by the Sani Tribes of Yunnan and the Cycle of Twelve Animals.) 当書文の

中國文は「印度の雑誌「東方雑誌」」1号(一九六六)に發表されたもの。

十一、李霖燦、張琨、程才、(中)語の韻圖表 Li Lin-ts'an, Chang K'un and Ho Ts'ai, Moso and Tone charts.) 程やむらハヤハ人ル共圖シトヤハ韻の韻圖を採証した業績。

十二、饒宗頤、廣東省韓江流域の畲族 (Jao Tsung-i, The She Settlements in the Han River Basin.) 畲族部落の採証資料として画入の系譜が紹介されたもの。

十三、羅香林、越銅鼓、その鑄造と使用 (Lo Hsiang Lin, The Yüeh Bronze Drums, Their Manufacture and Use.) 鐘鼓の使用は雷神崇拜の關係あり也。然や古代楚國の領域に分布弘じたもの。

十四、徐松江、南シナの僮族 (Princeton Sung-shih hsi, Chuang People of South China.)

十五、何培明、極ハナの廳屋 (Ho Kê-en, The Tanka 艤家 or Boat People of South China.) 「東方文化」 Journal of Oriental Studies, 1959-60. 之母國語原文が發表されたもの。

十六、マーベラ、右左垣如韻律 (K. M. A. Barnett, Wong-chuk=Left, Wongma=Right? A possible clue to one of the local pre-Chinese Language.) 且右も同シト先住民族の韻語の遺存を知るべくもの。

十七、ルーカム、漢化華人の韻譜 (Micael Loewe, Chinese

Penetration to the South during the Han Period.)

南漸は漢人の移住やのものも漢の行政権拡大によるものと
う意見、

一八、王鉄龜、漢代の貴州 (Wang Chee-shu, Kweichow in
the Han Period.) 漢代貴州の歴史を考証し、牂牁江を北盤
江と改めた。

一九、吉川幸次郎、廣東における宋代詩人 (Yoshikawa Ko-
jiro, Sung Poets in Canton.) 蘇東坡、揚万里の詩を訳す。

二〇、ハギルヘルム、華南家族のハーバル・サリード及び移
住 (W. Eberhard, Social Mobility and Migration of
South Chinese Families.) 壮國の家族の長男だけが教育を
受けた後を以て、後には子供の中有人の者一人だけが教育を
受けた。外の兄弟は家に止まり土地をたがやす、またも一つ
の型は家を出、町に行き商人になる。これら二つの方法とひと
う家族が集団で町に移住する型もある。

二一、羅香林、中國文明の南漸と廣東省における學術の進歩
(Lo Hsiang-lin, The Southward Expansion of Chi-
nese Civilization and Advancement of Learning in
Kwangtung Province.) 北方漢人の廣東省流入と伴に文化
的進歩とともに人材輩出を五期に分つて略述する。

二二、メアリ・マヘグ、越南に対する宗主權 (Klams Mading,
Suzerainty over Annam.) 伝統的統治の歴史題など
だ中國の主權のことを述べ、法律觀念の相違を指摘する。

二三、モートン、華北及び華南における都市 (F. W. Mote,
Cities in North and South China.) 壮國の南北の都市

はやれども南北の地域差を代表し、廣東と西安とも全くむ
しめ動的静的の相違がある。

二四、余秉權、北宋時代湖南の漢人 (P. K. Yu, The Han
Chinese in Hunan under the Northern Sung Dy-
nasty.) 此時代漢族の居住地であつたのが徐々じつに漢化さ
だ。

二五、チャーチューハム、仏教輸入時代の嶺南学界趨勢 (G. E.
Sargent, The Intellectual Atmosphere in Lingnan at
the time of the Introduction of Buddhism.)

二六、蘇雲卿、古代マラヤ研究 (Hsü Yün-tsiao, Notes
on the Studies of Ancient Malaya.)

二七、羅香林、宋代廣州における回教、その貿易残止 (Lo
Hsiang-lin, Islam in Canton in the Sun Period,

Some Fragmentary Records.)

二八、トマシクモートン、英國のシカゴ中国大通路探査 (Thaung
Blackmore, British Quest for China Trade by the
Routes across Burma (1826-1876).)

二九、饑荒題、永樂大典に記された南海地名類 (Jan
Tsung-i, Some Place-Names in the South Seas in
the Yung-lo ta-tien.)

二〇、蘇振江、鄭和船隊の訪問した東南アジア、印度、アフリ

力の語彙域 (Su Chung-jen, Places in South-East

Asia, The Middle East, and Africa visited by Chêng

Ho and his Companions, A. D. 1405-1433.)

三、趙令揚、明実錄、東南アジアの新研究 (L. Y. Chiu, Ming Shih Lu, Southeast Asia)

The Ming shih-iu, New Studies in South-East Asia.

Sino-Javanese Relations in the Early Min. Period.)

三三、陳璋、明代東南アジアと中国間の密貿易(Chan Cheung)

The Smuggling Trade between China and South

East Asia during the Min Dynasty.)

三四、ノールトン、ピジン・イングリッシュと葡語 (Edgar C.

Knowlton, Pidgin English and Portuguese.)

イングリッシュの成立はボルトガル語の影響を受けたことを認めよう。

On the Portuguese Dialect of Hong Kong.) 十八

ンとマカオに行われる古態のポルトガル方言はマラッカとイ

ンドネシアの方言と交渉あり、但しボクサー氏の云われる

日本語の影響ありという説は疑しい。

三六、トンプソン、香港英語の語彙における外来語偏重 (R.W. THOMPSON English Dialects in the Transition)

W. Thompson, Exotic Fieleiences in the Lexicon 6
English as spoken in Hong Kong) に對する「トム」

いうような外来語が香港英語で多く用いられるのは自己の差

別の優越を信ずる植民地的根性の影響か？

三七、クラマー・ベイン、英國最初の支那学者、モリソンの弟子
タウンヘン (J. Z. Crammer-Byng, The First English

Sinologists, Sir George Staunton and The Reverend

Robert Morrison.)

三八、羅香林、王韜（一八二八—一八九七）及びその西人の朋友（Wang T'ao and his Western Friends）羅氏は十九世紀の半ばに中国と歐米との交流が盛んに行われながら何故中国の近代化が日本よりおくれたのかと反問し、日本は中國より小国であること、日本は前に中国より文化を借入れた経験の持主であり、一千年後歐米より借用するにそれ程抵抗を感じなかつたのだと説く。

三九、柳存仁、辜鴻銘（一八五七—一九二一）の中國文明
論（Liu Ts'un-yan, Ku Hung-ming and his Interpretation of Chinese Civilization.）彼は西洋の歴史から
その根據を述べてゐるが、かゝり中国の歴史がどうか
考へられるを論じた。

四〇、陳学霖、モリノハ記念学校の四人の中國學生（Chan Hok-Lam, Four Chinese Students of the Hong Kong

Morrison Memorial School.) 容閔、黃勝、黃寬、唐傑の

四人をあげてその功績を説く。

Durand, Les Transcriptions de la Langue Viet.

namienne et les l’Oeuvre des Missionnaires Euro-

péens.)

四二、裴光裔、十九世紀越南に於けるロシア生存者 (Bui

Quang Tung, Un Rescapé Russe sur le sol Vietnamien au XIX^e siècle.) 付ふじては宮廷保存文書も。

四三、賀光中、東南アジアの中國詩文 (Ho Kuang-chung,

Chinese Literature in South-East Asia.)

四四、羅錦堂、印支及南洋中國研究 (C. T. Lo, Chinese

Studies in Taiwan.)

四五、トマ・クヤード、ミルマ史文献と國人及び外人の學者達 (Thaung Blackmore, Burmese Historical Literature, and Native and Foreign Scholarship.)

(以上第五部)

以上が本書に蒐録された諸研究であり、中には単なるレジュメに過ぎぬものがあるけれども大体香港學界を中心としての東南ア研究の趨勢を知るに便利である。たゞ既に六年の星霜をけみし最近の研究に及ばぬ恨みがあるが半世紀にわたつた香港大學の學術的業績を記念する出版としてふさわしこ。

香港にはこの外新亞大學に、東南アジア史研究室を中心とした陳炳和君達のグループがあり、崇基學院にも新しい研究者林天蔚君などが出てゐる。大体民族主義の擡頭にともない、香港も今後固有言語を中心とする講座陣が主力となつてくると考えられるがそれについて香港大學の中文科主任饒宗頤教授が此八月にシンガポ

ール大学に赴任されたのによれば香港大學にとりてほんとうに惜しいことである。香港大學の中國史科主任はドレーク教授の後をつゝだ、羅香林教授であるが羅・饒両先生が何れにいられようとも今後益々此方面の學問の推進者として華僑學界に於て活躍されんことを祈つて止まない。